

私は助産師で、現在クリニックに常勤として勤務している。院長は出生前診断などで産科をリードする大学出身であることが関係し、この大学病院での出生前診断の結果、染色体異常や先天奇形が判明した場合、妊娠中期中絶希望の妊婦が転院されてくることがしばしばある。

私たち助産師は妊娠中期中絶のためだけに関わりを持つことになり、気が重い。

最初は先輩の見様見真似でケアを行っていたが、今では入院時の対応から分娩進行のケア、その後の精神的ケアを含めたケアなど一連の流れは出来るようになったが、何度経験しても障害を理由とした妊娠中期中絶に慣れることはない。

中期中絶は妊娠12～22未満の中絶のことで、妊娠初期の中絶方法と違い、薬剤を使用して分娩方式で娩出させる。もう立派に人の形をした胎児を見るのは本当に辛く、法律で許可されているとはいえ人殺しに加担しているような気分になる。

20週以降では娩出時に啼泣したり動いたりする子もいて、心に、ずしっと来るものがある。亡くなった状態が出てきてくれた方が安心するのが正直なところである。

この子たちは進歩した医療の犠牲者なのだろうか、知らなければ生まれてこられた命だったのだろう。多発奇形で重度の障害がわかっている場合「産まれて来たら大変。産まれない方がこの子のためである。」と言われることもある。

これについては私自身もしっかり述べられるような意見を持ち合わせていないが、養育される親御さんの苦悩は想像してもしきれない。しかし、染色体異常はなく単発奇形、例えば口唇口蓋裂や四肢短縮症、関節拘縮などの理由で中期中絶を選択するケースも少なくない。出生後の手術やリハビリで十分に日常生活を送ることが出来るレベルでも、中絶を選択される方もいる。わかりすぎる現代の医療は確実に犠牲者を増やしているようにも見える。

幸せな出産を手助けしたくて助産師になった私が、なぜこんなことに苦悩しているのだろうかとか次第に感じるようになっていった。このような日々に精神的にダメージを受けていた矢先に公開講義を聞いて気づかされるが多かった。

障害者にとって生きづらい社会がこの子たちを犠牲にしている。きっと両親はすごく悩まれたのだということは理解できる。「産まれて来て普通生活が出来なかつたら可哀想」「障害者を育てる自信がない」「私は産みたいが夫や両親が反対している」などの声をよく聞く。

私に関わるのは中絶を意思決定した後のタイミングであり、その言葉に矛盾を感じながらも受け入れる、あるいは聞き流すしかない。両親からも、関わった医療者からも「産まれてこなくていい命」と判断された子の娩出後の姿は何とも表現出来ないものであり、その場に居合わせる者にしかわからない空気感がある。

世の中の障害に対する偏見と社会制度、街づくりや今後さらに進歩するであろう医療がさらなる犠牲者を生むであろう。それが不妊治療後の妊娠の場合はもっと残酷である。「作って選んで中絶する」簡単に言えばこういうことになる。講義を聴いて、私の脳裏に焼き付くあの子たちの娩出後の姿を少しでも力に変えていかなければならないと感じた。

それが分娩に立ち会った者の使命であるように感じる。これといった芯のある答えは出せないが、障害があっても産むと決意した方のサポートに繋がるように、地域や社会にも目を向けていきたい。